

Title	<国際学会の印象記>：第6回International Cytokine Conference "Cytokine 2006"： オーストリア国ウィーン市2006年8月27日～31日
Sub Title	
Author	笠原, 忠(Kasahara, Tadashi)
Publisher	共立薬科大学
Publication year	2007
Jtitle	共立薬科大学雑誌 (The journal of Kyoritsu University of Pharmacy). Vol.2, (2007. 3) ,p.47- 48
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	学会印象記
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=jkup2007_2_047

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

<国際学会の印象記>

—第6回 International Cytokine Conference“Cytokine 2006”—

オーストリア国ウィーン市
2006年8月27日～31日

笠原 忠

Tadashi Kasahara

2006年8月27日～31日までの5日間、オーストリア国ウィーンにおいて、第6回 International Cytokine Conference “Cytokine 2006”（会場は Stadtpark-Hilton ホテル）が開催され参加、発表した。今回は、国際サイトカイン学会（ICS）と国際インターフェロンサイトカイン学会（ISICR）ならびにヨーロッパサイトカイン学会（ECS）とのジョイントカンファランスのため、参加者は700名を超える大きな会議であった。この学会は毎年10-11月に開催されてきたが、今年はモーツアルト生誕250年で盛り上がるウィーンで開催、8月中ということもあり、教室からは大学院生2名とスタッフ2名が参加した。

本学会での話題は、サイトカイン／インターフェロン（IFN）の遺伝子発現制御、シグナル伝達、細胞生存と細胞死の調節、免疫・炎症、生体防御、がん、自己免疫疾患とサイトカイン／IFNとの関わり、新たなサイトカイン、サイトカイン療法など、多岐の分野にわたって発表と討論が行われた。学会前夜のキーノートレクチャーは J.Darnell (Rockefeller Univ) の Signal transducer and activator of transcription (STAT) の発見から現在の知見までの膨大なレビューで開始した。4日間とも午前中は、8:30からのプレナリーセッションで始まった。その中で注目されたものをいくつかピックアップする。D.Hilton (WEHI, メルボルン) が、サイトカインシグナル

系における負の制御系 SOCS (suppressor of cytokine signaling) 分子の機能と役割を示した。SOCS-1 が TLR-2, -4 を介するシグナルも抑制すること、SOCS2 は成長ホルモンの作用系を抑制すること、SOCS-5 が EGF-R 系の抑制に関与すること、SOCS-7 欠損マウスは水頭症となることなど、SOCS ファミリーの複雑な制御が明らかとなった。I.Dikic (Goethe Univ) は、NF- κ B 活性化経路におけるユビキチンの関与と、新規のユビキチン結合タンパク (UBM, UBZ) の役割とともに、この過程に関与する CYLD 遺伝子の欠損が皮膚がんの形成をもたらすことを示した。岸本忠三博士（大阪大学、ICS の Honorary Lifetime Membership Award 受賞）は、IL-6 について、BSF-2 の発見からトシリズマブとして関節リウマチの抗体治療薬として開発されるまでの経緯について講演した。藤田尚志博士（京大ウイルス研、ISICR の Milstein Award）はウイルス感染によってタイプ I IFN が産生される際、センサーとして働く RNA ヘリカーゼ RIG-I (Retinoic acid inducible gene1) の発見とその作用機構について講演した。RIG-I は、CARD ドメインとヘリカーゼドメインをもち、IPS-1, TBK-1/IKK-1, IRF-3,7, NF- κ B 活性化に重要な働きをする新規分子であることを明らかにした。RIG-I 関連分子は最近続々と見つかり、自然免疫や IFN 産生において重要であることが示されているが、審良静男博士（大阪大学）は、

RIG-1 およびその関連因子のノックアウトマウスを作成してその機能を解析した。K.Rajewsky (Harvard Med Sch) は B リンパ球に関する TNF ファミリーによる制御と RNAi によるリンパ球分化の制御に関する最新の知見を披露した。

その他のシンポジウムやワークショップでは、例えば、IL-21 が Th2 細胞の分化に重要であること、IL-22 は抗炎症作用を持つ Th1 サイトカインであること、Th1, Th2 とは異なる新たな Th17 サブセットの分化、増殖に TGF β 、IL-6, IL-23 が必要であること、IL-27 が EAE のような自己免疫疾患の制御に関与すること、などが示された。また、多くのケモカインの受容体である D6 はケモカインのクリアランスに働き、D6 欠損マウスは乾癬や皮膚がんを起こしやすいこと、その他、がん免疫におけるケモカインの役割、アポトーシスとオートファジーの制御、種々のシグナル分子の役割を siRNA 導入によって解析するなど、新たな知見が盛りだくさんであった。私どもは、TNF α 刺激誘導細胞死における TRAF6 の役割について(市川)、レチノイン酸による好酸球分化とケモカイン産生(吉田)、FAK 欠損細胞における TNF α 誘導アポトーシス亢進とその機構解析(園田)についてポスター発表を行い、討論を行った。

4 日間にわたって、プレナリーセッション、シンポジウム、ワークショップ、ポスターセッションと盛りだくさんのテーマの発表と討論に大いに刺激される学会であった。なお、当初ロンドンの Gordon Duff 博士から、CD28 抗体 (TGN1412) の Phase I 治験でおきた事件についての膨大な中間報告が出された直後でもあり、最終日に緊急報告が予定されていたのであるが、Duff 博士は TGN1412 調査委員会の責任者であり、係争中の問題であるので、発表が急遽中止となったのは残念であった。

学会中の夜には、RatHouse(市庁舎)でのディナーパーティーと Laxenburg 宮殿でのモーツァルトコンサートが組まれており、Social Program も楽しめるものであった。私どもが宿泊したホテルは会場から地下鉄で 15 分ほどのハブルブルグ王朝の傑作、シェーンブルン宮殿に隣接するホテルであり宮殿の散策には好都合であった。毎日地下鉄で通ったが、8月末というのに通勤客はコートやジャンパー姿で

あり、実際かなり冷え込んだ日々が多かった。ウィーンは地理的には稚内よりも北に位置しており、冬のシーズンの厳しさを十分予想させるものであった。なお、本学会の抄録は、Eur. Cytok, Netw Vol. 17, Special issue, 2006 に掲載されている。



(旧市街にある 16 世紀創業の薬局、エンゲルアポテーク。残念ながら、日曜日で休業であった)